

ふべきであるが、然し著者の所謂歴史的社会の實在さには如何なるものであらうか、吾人は猶從來諸家の説を討ね慎重に考察を重ねたいと思ふ。尙共存説に對して次の如き場合はこれを如何に考ふべきであらうか。即ち彼の菊池寛氏の「恩徳の彼方へ」にある如く一人あり父の讐なる仇敵を討たんとす、敵手會々既に大悟して肉身を捨てたりと雖も今多年の宿願たる公益事業を果し終ふる迄命を乞ふ、即ち諾して其業を畢へて不俱戴天之仇を討つ日の一日も速からんが爲め共に其業に協働する時、其心は宿怨に燃へ共存の欲求も無くして二人は猶社會を成して居るではなからうか。

又家族の成員東西に四散して何等相互作用ないとするれば即ちこれ全然別世界の人であり、此等の人は生理學的に若干の類似を有し、又法律上家族關係を有するといふに止り最早社會學的考察の外にあるものといふべきではあるまいか。若し相互作用の斷絶でなく斷續であるとするればこれ相互作用あるものと見てよいではあるまいか、尙著者は反對、争闘、分離は結合に非ず、故にこれを含む相互作用説は採るべからずと説かれるが、然し又著者の説によれば反對も亦欲望の平行に因由し、それ自體一の社會關係と見て居られ、尙此等の現象が社會學的に重大な意義があることを認めて實際著者の社會學的説明に重要な一部をなして居る以上、これを社會學の對象とする方が「便宜上」に於ても適當なりと見られぬであらうか。文化價值と社會結合の觀念との關係、及文化一般の概念に就いても少し教示を受けたいと思はれた。

淺學未熟なる吾人は今粗淺蕪雜の論を以つて著者多年の思索の結果に對し積極的の異見を述べんとするものでは勿論ない。右は

只讀過の際思ひ浮んだ疑問の二三を記したに止る。若し夫れ吾人の本書によつて得たる多大の恩恵は誠に感謝の辭を知らない。私にはかくの如き眞摯な、包括的にして又獨創的な一新社會學體系が東海の學界に現れ出でたることを誇らし、衷心敬意と慶意を表し苟も社會學を云爲するもの、是非一度は讀破を要する著作として汎く斯學に興味を有する人々にお薦めしたいと思ふ。願くは著者の益々健かに此上も學界に裨益を興へられんことを。大正八年二月、東京神田南神保町、岩波書店發行。定價六圓五拾錢。(綱直勇)。

現今歐米教育の進化

文學士 松濤泰巖 著

著者は嘗て小學校を除いて殆ど各種の學校に教鞭を取られ、口下は奈良女子高等師範學校に於て専ら教育學を講ぜらるゝ、學識經驗兼ね備へた人である。氏が海外留學を終へて昨春歸朝せられたるを聞き、我が教育研究會では歐米教育事情を聞くべく懇請した早速快諾「國語問題並に教育行政問題を中心として」御話し下さつた。其際自分は紛糾せる問題をよくもあれだけ簡潔に話されたものだなと感じた。そしてつゞきの問題に就ても御話を承りたいなと思つた。所が小西先生から「松濤君から本が来たから見よ」と云はれて本を手にした時初つ望みの期せずして達せられた事を嬉び、一讀し終つて歐米の新教育が手際よく紹介された事に感心し我國の教育者を益する事少なからざると思つたのであつた。勿論あゝした事柄なれば研究室に通つてゐる程の人ならば容易に知り得る事であり、又周知の事だと思つた節もないでなかつた。け

れどもそれには數箇月を要する。此の書を讀めば數時間で足りる外國語の嫌いな人に取つて猶一層結構な寄與であると思つた。

内容は前編、後編、續編の三編に別れ、前編は緒言、結婚及家庭生活、在學の奮勵、目的の意識、設備の善美、異常兒の教育、教育者の努力、學科擔任法、實生活との接近、學級の編制、社會との協力、の十一章に。後編は全我活動主義の教育 (Project Method)、大戰と歐米の教育、米國の中間學校、英佛の補習教育、獨逸の統一學校、歐米學制改革の意議、の六章に。續編は、歐米の教育と婦人、歐米婦人の長所、歐米婦人の生活、歐米婦人雜觀、の四章に別かたれてある。

續編では著者の女子教育觀も伺はれて面白い、女子教育者、女教員などに特に此の編の精績を推奨す。

要するに現今歐米教育の實際的方面に於ける進化を知るには好箇の參考書である。

弘道館出版、定價貳圓五拾錢。(伊藤猷典)